

フリースと心理主義(一)

速川治郎

(一)

フリースという名の哲学者がどのような思想の持ち主であったかを知る人は、日本国内では少ないのではないだろうか。平凡社の哲学辞典をひもとくと、フリースについての叙述はカントほどもちろん多くはないし、シェリングよりも少ない。しかし、そこで目につくことがある。それは次の文中、傍点のある語である。「ドイツ観念論に心理学的立場から反対した有力な学者の一人。：カント哲学を心理学的に基礎付けようとし、カントのア・プリオリは心理学的分析によって発見され、確かめられた事実であると主張した。いわゆるカント解釈の心理主義は彼に始まるといわれるゆえんである。」そこでフリースが心理学的立場、心理主義をとったということ、このことに心理主義を持たざるを得ない。その心理主義という語は筆者の思想遍歴からすると悪いイメージしかない。論理学上の心理主義の影響が筆者に強かったからかも知れない。フッサールが『論理学研究』の中で心理主義を非難したことの影

響もあるかも知れない。とにかく、フリースが心理主義をとったと言われることは、非難されるべきことなのか、そうでなければ、どういう意味を持っているのだろうか。この点を掘り下げて考えてみたいという衝動にかられたのである。

(二)

さて、フリースの心理主義についてかなり詳細に論述した西ドイツの哲学者がいる。それは、ルツ・ゲルトゼッツァーである。彼はフリース全集の編纂者であり、その全集に対する序文を第一巻の初めに書いている。その中にフリースの心理主義についての詳細な論述がある。これを解釈することによって、彼の心理主義と言われる内容を説明してみたい。

現代の哲学者カール・R・ポパー、ハンス・アルバートはフリースをそれなりに評価してはいるが、ポパーもフリースを心理主義者としている。「ポパーはフリースを重要視しているけれども、そのことから実りのある成果が生じたわけではなかった。ポパーはもちろん古い皮袋に新しいワインを入れた。が、このことによってフリースに対する偏見が更に強くなってしまったのである。」フリースは心理主義者であるということで簡単に片付けられてしまったと言えることができる。

（三）

さて、それならば、哲学史家によってフリースはどのように見られたのであろうか。以下にその実状を述べてみよう。テンネマンの『哲学史概説』（一八二〇年）では次のように書かれている。「フリースの研究には、哲学的人間学を發展させるのに必要な価値がある。それもそのはず、彼は哲学的人間学をすべての哲学の基礎学とみなしていたからである。更に彼の研究には固有の多くの理論が含まれている。例えば、彼が人間学的研究を通して準備した彼の論理学（人間学的論理学）は人間学にふさわしい独特の多くの研究を含んでいる。」（四四五頁、次頁）確かに人間学的論理学という表現は彼独自のものである。形式論理学になれ親しんでいる者にとっては、それは奇異な内容を持っていると言えよう。イマヌエル・ヘルマン・フィヒテの『近代哲学論考、デカルト、ロックからヘーゲルに至る批判的近代哲学史』（一八四一年）の中では、「フリースの新理性批判は思弁的に取り扱われた物事全体を初めて完全に心理学的に究明している。」「こうして彼は心理学的、人間学的理論を措定する。換言すれば、彼は人間理性をその理論によって分解、研究する。しかも、思弁の代りに、また、本来的な意味では最早や存在し得ない形而上学の代りに。」（三三三頁）と書かれている。そして、そこでは主観的のみに基礎付けられるロック主義がフリースの理論にされている。

エルンスト・ラインホルトは自著『哲学史、その發展の主要な契機にのっとって』（一八四五年、第三版）の中で次のように述べている。「フリースによって提出されたものを判断するためには、二重の観点が区別されるべき

であり、そして結合されるべきである。一方の観点では、カントの思想を押し進めて行くフリースの学説とカント哲学との関係が考えられ、他方の観点では、発展して行く近代哲学全体の中で、また一九世紀の哲学者の中でフリースの立場が考えられるべきである。この二重の観点がある。前者に関しては、フリースはカントの批判主義の欠点に気付き、その欠点を改良した。そして、フリースはこのことをはっきり自覚していると言える。人間精神を理論的能力と実践的能力に分解する時、カントは自分の認識論の眞の基礎、自分の固有の立場を明確にしなかったが、フリースはそれらを明確にした。また、フリースは主観的觀念論の経験心理学的基礎を確定し、あらゆる分野の中で、経験心理学的体系を發展させ、筋の通った論述をした。カント学派のフリースは偉大な師カントの觀念論に全く忠実であり、傑出した成果を挙げ、こうして確固たる名声を挙げたのである。フリースによって認められた哲學的問題領域全体、つまり批判的哲學の方法、内容を入念に論述、改良することによって、哲學史上不滅の、名譽ある場が確保された。特に、彼が経験心理学の領域を、その細部にわたって綿密な觀察と鋭い論述をすることに、大きく、しかも活発に拡張したのは彼の功績であり稱賛されるべきである。」(第二卷、二二頁、次頁)

フリードリッヒ・ユーンパーヴェークの『哲學史概説、タレスから現在まで』(一八六六年)の中で述べられている。「フリースはア・プリオリな認識の可能性を研究する理性批判はア・プリオリな認識により獲得され得るのか、それともア・ポステリオリな認識によって獲得され得るのかという問いを出す。そこで、彼は後者を認める。敷衍して言えば、われわれはア・ポステリオリにしか、すなわち内面的經驗によってしか、ア・プリオリな認識を持ていないということ、また、どんな風にその認識を持っているのかということが分らない。従って、内面的經驗に基づく心理学がすべての哲學的思索の基盤を作らなければならないのである。フリースの考えでは、カントは

部分的に、ラインホルトは全面的に理性批判の性質を誤解しており、理性批判をア・プリオリな認識とみなしたものである。カントは先述の問いを出さなかった。だが、彼は疑いの無い認識が少くとも数学の中に事実存在するということを自分の研究の基礎にしており、更に諸カテゴリーを判断の諸形式から、つまり経験を通して与えられた諸形式から認識しており、次に道徳哲学においては、いわば純粹理性の事実である直接的人倫的意識から彼は出発するので、次のことは否定されはしない。すなわち、それはカントもまた自分の理性批判を内面的経験の事実か、あるいは推定上の事実に基づかせるということである。批判を問題にする人が自分の内面的経験により見出すのと同じものを他人が皆心の内に経験するのだという前提、この前提が正当であるかどうか、あるいは、なぜ正当であるのかという疑念はカントにも出て来る。しかし、われわれが内面的経験を通してア・プリオリな認識を持つことを知るのだという仮定には決して矛盾は存在しない。なぜならば反論不可能性、もしくはア・プリオリ性は、義務意識に結合しているように、数学的認識、形而上学的認識にも付着していることになっているからである。しかも経験的性質はそれらの認識そのものではなく、われわれがそれらの認識を持つというわれわれの意識にのみ付着しているからである。カントの意味でのア・プリオリな認識が存在するならば、フリースが仮定したように、形而上学は、数学と同じように、すべての経験科学から完全に区別されているということが確かに想定され得るであろう。だが同時に内面的経験に基づく学、すなわち理性批判は、先述の反論できない認識、あるいは、少くとも反論不可能性を要求する認識、これらの認識の妥当性についての正当な理由、その妥当性の限界を決定しなければならぬということが想定され得るであろう。」以上がユーバーヴェークの意見である。

哲学史家であり、ヘーゲル学派の哲学者であるクローノ・フィッシャーは自著『近代哲学史』の中で、フリースの

章を設けて書いたわけではないので、フリースを明らかに評価していない。また、フィッシャーは、学長就任記念講演『イエーナにおける二つのカント学派』（一八六二年）の中で、フリースの思想の動きを真剣に研究しても、無意味であると断定している。が、この断定はレオナルト・ネルゾンによって初めて徹底的に批判された。

それはそれとして、フィッシャーによれば、フリースの哲学は次の三つの解釈によって明らかになると言う。すなわち、

(一)「哲学的基礎学は形而上学ではない。この考えは同一性を認める哲学者、および、ヘルバルトに対して述べられている。

哲学的基礎付けが理性批判となる。この表現はカントの考えと共通している。しかし理性批判は形而上学的洞察ではない。理性批判は自分自身を正しく理解するならば、形而上学的洞察ではあり得ないし、その洞察であろうとも思っていない。だから真に批判的な哲学は決して同一説ではない。この解釈はラインホルト、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルに対立していることを物語っている。

理性批判が形而上学ではないならば、それは何であるのか。理性批判は人間の理性と理性の能力との認識である。この自己認識は自己観察によってのみ、すなわち、内面的経験によってのみできるのである。経験科学は自然科学である。内面的経験科学は内面的自然科学、すなわち人間学、ここでは、いわば心理学、経験心理学である。従って理性批判を正しく解釈するならば、それは経験学である。この学の内容は人間学的であり、その学の認識は経験的である。このことこそ正にフリースの立場である。」

(二)「フリースによれば哲学的基礎学は形而上学ではなくて、むしろ内面的自然科学の意味での人間学、すなわち心

理学的人間学である。これが本来の第一哲学である。この人間学的基礎の上に理性批判があり、これに形而上学的認識が基づいている。

カントの批判は人間学的なものになるうとはしない。ここにカントとフリースの違いがある。フリースがやらなければならぬと考えた仕事は、カントの意味での理性批判を新しくすることである。だから、フリースは『新理性批判』という本の中で、カントの理性批判を人間学的に改造したのである。別言すれば、フリースはカントの理性批判を経験心理学の言語にほとんど翻訳したのである。」

(三)「ところで理性批判が単に心理的、従って、端的に経験的であるならば、いかにして理性批判の洞察する客体がア・プリオリであり得るのだろうか。これに対する明確な答えが出されなければならない。とにかく、その客体がア・プリオリでないならば、空間と時間はア・プリオリではない。カテゴリーはア・プリオリな概念ではない。そうすると理性批判はどこにあるのか。」

上の二つの問いに対してフリースは次のように答えることができる。理性批判によって発見されるもののそのものはア・プリオリである。が、発見作用自体はア・ポステリオリである。理性批判の認識する対象はア・プリオリであるが、認識すること自体は経験的である。しかし、ここには、ア・プリオリであるものはア・ポステリオリにも認識されなければならないと考える偏見が現れる。このような解釈に基づいてフリースの全学説が出て来るのである。また、この学説により理性批判が変革された。そのような解釈はラインホルト、フィヒテ、シェリングに対する論ばくの最たるものである。ところが、その解釈にはフリース哲学における第一虚偽が存在するのだ。ア・プリオリであるものは決してア・ポステリオリには認識され得ないのである。」

以上がK・フィッシャーの説明である。ここに、今日まで再三再四フリースに投げられた反論のきつかけを見出すことができる。こうして、次のような反論、すなわち、フリースは哲学の代りに経験心理学を示したり、第一哲学として心理的人間学を挙げたりして、批判についてのカントの考えを間違った方向に進めてしまったのだという反論、これが目に付くようになるのである。

オットー・リープマンもI・H・フィヒテ、K・フィッシャーが論述した路線を取り、『カントとそのエピソード』(一八六五年)の中で、カント主義をねじ曲げた新時代が到来したと述べ立てる。更に、リープマンは言う。

「フリースがカント哲学を修正しようとする試みは改正ではなく、ロックの経験主義への逆戻りである。その経験主義について、カントは純粹理性批判初版の序文の中で次のように言う。なるほど、人間悟性のこの生理学がすべての独断的、懷疑的論争に終止符を打つことになりそうであった。しかし、その生理学は経験から導出されるので、再びすべてのものが虫の食った古い独断主義の中に入ってしまい、そのためそのことが軽べつの種となったに、そこから科学を引き出そうとしたと。」

結局、カントの批判の本来的な意図を心理学的なものとみるのは、その批判についての極端な誤解である。この点に関するわれわれの判断の総括は、クーノ・フィッシャーの言うように、ア・プリオリにあるものはア・ポステリオリには認識され得ないとなる。」

以上の叙述がオットー・リープマンによるものである。この人は更に上掲書の中の「経験的方向、フリース」という章で、「フリースはカント哲学を前提にした。が、フリースはその哲学の有名な欠陥(物自体を仮定したこ

と)を除かなかつたばかりではなく、自ら容認している。従つて、この点で彼は批判主義を訂正しなかつた。それ故、カントに戻る必要がある。」と言うのである。ここから、フリースの哲学を受け入れにくいものにする状況が出て来るのである。

そもそも一九世紀は心理学が哲学から離れ始め、独立した個別的な学として急速に発達した時代であつた。その時代においては、彼の著書が心理学的なものであつたので、その中で秀れた書といった意味合いを持っていた。ところが、哲学の関心が新カント主義の発生と共にカントに向つて行つたので、フリースは哲学者として興味の無い存在になつてしまひ、また自然科学者としても過去の人となつてしまつた。更に、フリースが自分自身をカントの弟子であると公言したこともフリース哲学への関心を消失させる原因となつたかも知れない。

ヴィンデルバントは一八八〇年『近代哲学史―普遍的文化と特殊諸科学との関連において』第二巻を刊行した。その中の「カント以降のドイツ哲学の体系的発表」という章は「心理主義(フリースおよびベネッケ)」の節で終つてゐる。ヴィンデルバントは言う。心理主義は形而上学的体系の副次現象である。それと言うのも、心理主義は形而上学的理論を経験的心理学的に根拠付けるといふ観点から、その理論を改造して行くからである。そして、心理主義の代表者はすべて一定の見解を前提にしている。すなわち現代哲学の主観的原理は、認識する精神という自己を認識する経験心理学によつて、全哲学の根底が研究されなければならないという見解を前提にしている。心理主義者の中で最も重要な人物がフリースである。この人はカントの体系を経験心理学的に根拠付けるのである。フリースによれば、カントの全研究には心理学的性質があり、このことをはっきりと言つてよいのだ。その限りで、カントの行つた批判の出発点には心理学的前提があり、批判を行うと決めてくれる基準が常に心理学的洞察、見解で

あるということは正しかった。ところで、カントは理性諸形式がア・プリオリである理由を求めたが、この理由を決して経験的機能が作り上げたわけではない。このことを忘れてはならない。このようにヴィンデルバンツトは言っている。

A・ドレウスは『一九世紀三半前期における哲学』（一九一二年）の中の「心理主義」という章の中で、フリース、ベネツケを一緒にして取り扱っている。この場合、ドレウスは、フリースではなく、ベネツケを真正正銘の心理主義の代表者と見ており、フリースを感情哲学者としている。こうして、フリースは合理的性質を持った形而上学に絶望し、自分の哲学的世界観をカントに密着させて追求はするが、カントのア・プリオリな方法を放棄して経験心理学、人間学の上にその世界観を打ち立てようとするものと見られた。フリースから見れば、カントおよびこの人の後継者たちの自己欺まん、すなわち、われわれの認識のア・プリオリな諸形式が、あたかもア・プリオリにも認識可能であるかのような自己欺まんを彼らは持っているのだ。自己欺まんとなっているそのような仮定が、カントおよび思弁的観念論にとって、現実認識の絶対確実とおぼしい前提となっている。これに対して、フリースは、ア・プリオリな知性的機能をア・プリオリにもその機能の働いている際に見出せるということ、また、その機能を直接にそういう機能として意識するということ、これらのことが不可能であると言っているのは正しい。そして、フリースは認識の全くア・ポステリオリな性質を強調する。われわれは自己観察、経験心理学の方法、われわれの内的経験の批判的分析、これらのものによってのみ認識を確保するようになる。このようにして、理性批判は本当は心理学的経験であり、要するに心理学がすべての哲学的認識の基礎を形成しているのである。以上がドレウスの見解である。

『マックス・デッソワールの『心理学史概論』（一九一一年）の中では、フリース、ベネツケは共に心理学者として描かれている。すなわち「彼らは心理学をすべての哲学的思索の基礎とみなしており、意識の出来事の生気躍動性を強調する。フリースの学説は多くの点でカントにつながるが、しかし心理主義と批判主義とのどちらを取るべきかという重大な局面に際しては、カントを拒否するのである。」

ユーバーヴェークの『哲学史概説』第四部、『一九世紀および現代ドイツ哲学』（一二版、一九二三年）も次のように述べている。「ヤーコプ・フリードリッヒ・フリース（一七七三年—一八四三年）は心理主義の主要な代表者である。彼は思弁的体系に反対する。彼にはカントの認識論の諸欠陥を排除する考えがあったというよりは、むしろ、彼はその認識論を心理学的なものへ変えたのである。」「フリースは心理主義を基礎付けた。だから、彼はカントの批判を心理学的なものに曲げ、すべての哲学を自己観察に還元したのである。」「彼がカントの体系について行った最大の変更は、超越論的なものを心理学的なものに変えたことである。彼は徹頭徹尾心理主義者だった。彼の最重要な課題は、理性の心理学的研究である。」以上がユーバーヴェークの考えである。

『フリースを非難する批判者を更に批判するいわゆるメタ批判者の中では、新フリース学派の創設者、レオナルト・ネルゾンが特に目立った存在である。心理主義—論証に反対するネルゾンの主要な論証は後に詳しく述べるつもりである。

デンマークの哲学者、ヘフデングは『近世哲学史、ルネッサンスの終りから現代までの哲学史叙説、第二巻』（F・ベンディクセンによる独訳、一八九六年）の中で、フリース、ヘルバルト、ベネツケをロマン主義時代における批判哲学の底流として取り扱い、フリースの思想はいつまでも妥当するものだとしている。慎重深い研究者フ

リースはヘーゲルによって軽べつされ、また、ロマン主義哲学に対してロマンチックな感嘆をする人達によって今でもあざ笑われているが、フリースは自分の認識論、心理学、また倫理学の思想を發展させたのであり、その妥当性、価値は失われていない。これに対して、思弁的体系は歴史の上で興味を示すだけになってしまつて久しい。このようにヘフデングは述べる。

メッサーは、『哲学史、一九世紀初頭から現在まで』（一九一三年）の中で、フリースの明確な主要業績として次のことを挙げている。カントの場合、一時的にしか言及されなかつた二つの重要な問題をフリースは研究の中心に据えた。すなわち、(一)ア・プリオリなものの超越論的認識には経験心理学的本性がある。(二)カントのア・プリオリズムは心理学的人間学によってそのア・プリオリズムの基礎を確保しなければならない。この二つの考えをフリースは中心にしたのである。

これらに対して、もちろん心理主義という非難が投げかけられる。フリースは理性批判に経験心理学的性質のあることを認めるので、心理学の意味を誇張しているのではないか。また、彼は心理学の意味を哲学全体の基礎にしているのではないか。この非難はしかし当を得ていない。なぜならば、フリースは心理学的な『新理性批判』（一八〇七年）の中で、認識の妥当性をば証明しようとしているのではなくて、例のア・プリオリな直接的理性認識を事実として証明しようとしているからである。そして、フリースはア・プリオリな総合判断が非直観的な直接的認識の中に含まれているという見解を持っている。また、彼は直接的な理性認識の妥当性を確信する自然的實在論者であることによって、ヤコービの立場と同じになっている。ただ、フリースはその直接的確信を感情の暗やみの中にそのまま置いておこうとするのではなくて、反省によってはっきりと意識しておこうとするのである。ここに掲

げられた二つの問題（超越論的認識と理性批判の課題）においては、フリースは事実カントに反抗した第一歩を記したと言ってよい。ア・プリオリなエレメントの確認は経験的な性質のものである。というのは、その確認は、そのエレメントの提出されている事実を把握することによって、つまり人間の認識によって、生じるものだからである。ただ、どんな形でこのア・プリオリなものが個人の知性の中にあるのか、そうして、発展されるのかという心理学的問いは、二次的なものに思われる。哲学的にそれよりも重要なものは、当面する諸学の内容にア・プリオリな要因があることを指示するという認識論的課題である。

更にフリースが次のように言うことも正しい。認識一般の妥当性を証明することは、哲学という学科（これは理性批判、あるいは認識論と呼ばれるであろう）の課題ではあり得ない。以上がメツサーの主張である。

フリースが彼以外のドイツ観念論者に対立することをヘフデングは述べたが、これに似たものはライニンガーが『カント、彼の信奉者と反対者』（一九二三年）の中で語ったフリースとハーマン、ヘルダー、ヤコービとの対立の中にある。それは次のようになる。「思考の自立性、哲学的力の自立性において、フリースはハーマン、ヘルダー、ヤコービをはるかに超えている。カントに対する彼の異論は、本質的には方法的傾向のものである。フリースはカントにおける理性批判そのものの認識論的基盤を懸命に論及している。つまり、純粹理性批判は自己觀察に基づく一種の経験科学なのである。これは、理性批判があたかも認識心理学によって置き換えられることになるかのように理解されるべきではない。なぜならば、フリースも悟性法則の妥当性を経験心理学の規則に基づかせるのは、矛盾であるという見解を持っているからである。ただ、理性批判は心理学的基礎工事を必要とするということ、従って、理性批判には認識力の人間学が先行すべきであるということ、この二つのことが考えられていたので

ある。」以上がライニンガーの論述である。先の基礎工事という語は一つの基礎付けだけを固守する意味に取ってはならないであろう。ファルケンフェルトも『哲学入門』（一九二六年）の中で、そのことを明らかにしている。すなわち「ア・プリオリに妥当するものを経験によって証明しようとするフリースの学説は心理主義であり、経験科学へ逆戻りするものである。この科学からカントが哲学をまさに自由にしたのにもかかわらず。しかし、そういう非難は一つの事柄、すなわち、フリースの学説の最も重要な方法論的発見、つまり、いろいろな種類の基礎付けを区別するということを誤認しているのである。」

(四)

新カント学派の人達が心理主義を非難し、否定する気持は十分に理解できる。というのは、彼らから見れば、心理主義によって彼らの多くの主張が危険にさらされてしまうからである。彼らの哲学的基盤の尊厳が心理主義へ変えられてしまうことが彼らにとって問題なのである。認識と存在との制約を超越論的に研究することが心理学的研究であるならば、この研究によってカントの批判の本質的なもの（量的にはカントの大部分のもの）が心理学の分野のものとなってしまふであろう。それと共に、カントの独創的な、しかも今までの哲学をくつがえしたと言える革新がほとんど残らなくなってしまうであろう。このことは全くドイツ人の関心事であるということを念頭に入れて置く必要はあろう。なぜならば、イギリス人やフランス人は既にロック、コンディヤクの時代、またヒューム、ミルの時代において、連合心理学、イデオロギーに飛び付いていて、超越論的研究を心理学的研究と見ると

いうことは考える必要もなかったからである。

とにかく、カントは、自分の超越論的哲学を紹介する場合に、ア・プリオリな方法、学とア・ポストエリオリな相対的認識方法、個別科学とを区別する点に留意した。前者は認識の必然性と普遍妥当性を保証するのに対して、後者は帰納法により普遍性を仮定するものだからである。従って彼は超越論的哲学と心理学とを区別した。別言すればア・プリオリ性、必然性と経験、偶然性とを彼は分離したのである。

更に思い出すべきである。感覚領域に制限された経験的偶然認識と合理性の枠内にとどまる普遍妥当主義的必然認識との区別は、アリストテレスの学の伝統に属しているということを。この伝統に、カントが純粋数学、普遍的自然科学のア・プリオリな性質を事実として通用させた時、関連していると言えよう。彼はまた純粋数学、普遍的自然科学の中に普遍妥当主義的合理的エレメントがあることをもちろん考えた。だが、このエレメントを、一八世紀には別の諸学、すなわち単に事柄を記述するだけの、あるいは経験し、物語るだけの段階を超えた諸学が要求した。このような意味合いがカントの術語の中にまで入り込んでいるが、それはヴォルフに見出せる。ヴォルフは自分が研究した諸学をすべて経験的なものと合理的なものに分けた。従って、彼はカント的な意味で言えば、学の記述的、経験的、偶然的部分と普遍妥当主義的、合理的、必然的部分とを区別する。そして、ヴォルフの考えでは「経験心理学は人間のア・プリオリな心理から現れるものを吟味、確認するのに役立つのである。」

また彼は、普遍妥当主義的合理的認識によってすべてのものが確実になるということを前提にしていたというわけでもない。ところで、彼は普遍妥当主義的合理的認識による確実性を必然性と呼ばないで、ある事態の内的可能性があるという意味で、その事態の本質と称している。そして、「存在者の内的可能性（すなわち、無矛盾

性)を見抜く者がその存在者の本質を認識するのである。」彼も既に知っていた。われわれが認識するすべてのものを、われわれはア・ポストリオリに、つまり五官を使って認識するか、あるいはア・プリオリに、つまり悟性によって認識するかであるということ。この立言は彼にとって現代論理学的に言えば、完全な排他的選言である。

ヴォルフの古典的な科学理論の傾向は超越論的哲学を掲げたカントの新傾向とは本質的に区別される。そしてヴォルフへ後退することは、いわば墮罪となってしまう恐れがあった。しかし、それが新しい論理学的抽象概念の出現に伴って現実のものとなった。それと言うのも、その概念が一七、八世紀の数学的自然科学の普及とその成功とに結び付いて生じたからである。その墮罪となるものは科学方法論において内包的な概念論理学から外延的な概念論理学への転換である。後者の論理学は推理論の枠内で活躍する。その推理論によると、概念はその意味(内包)を顧慮しないで、個物を代表している機能を持つだけである。アリストテレスを範にとった古典的推理は、ただばく然と量化を取り上げて、「すべての」とか、「若干の」とか、「少くとも一つの」という表現で考えられたのに対して、一七世紀の終りには定量化の傾向が現れて来た。例えば、ステファヌス・ショヴィヌスの場合がそうである。彼は『哲学レキシコン』(一六九二年)の中で、推定される多くの個物が完全に数え上げられることを集合的、あるいは連係的推理とした。推理を外延に変える傾向を更に強く押し出した人としてJ・Ch・ランゲがいる。彼は外延関係を円形によって図示したのである。しかし、一九世紀の初めになってやっと、ドゥ・モルガンやブールが明確に外延的な「論理代数」を考え出したのである。

この論理代数は重要な意味を持っている。外延としての普遍概念は今やその概念の必然的性質を失っているのだが、かつては、その普遍概念が必然的性質を内包として(ヴォルフの場合には本質)まさに持っていたというこ

と、これが重要な意味なのである。そのことによって帰納と呼ばれるものの解釈も変わって来るのである。ペーコンの帰納は内包的普遍概念を持つことができた。だから、この概念が自然現象の形式となって、この形式は実例によって、必ず明示され得た。だが、これに対して外延的解釈においては、内包は、吟味されたケースの数に依じて、ただあるに過ぎないから、決して確実なものではないのである。

もちろん、理論的概念、理論的判断についての外延論理学的構想によれば、普遍妥当主義的理論科学もそれ自身の必然性、普遍性、確実性を要求できなくなってしまう。カントはこういう結論をヴォルフの心理学、合理的心理学に反対して出したのである。個別科学をア・プリオリな超越論的哲学によって基礎付けるべきであるというカントの考えは科学性(学問であるという特質)を明確にしようとしたと言える。

フリースもカント派の哲学者として、そのような転換を行った。フリースにとっても、認識の確実性、必然性を超越論的に基礎付けることが問題であった。しかし、フリースにとっては、科学性(学問性)についてのヨーロッパ共通の表象と結合することが必要であった。フランス、イギリスにおいては、認識の制約を心理学的に研究しようとしていたが、このことと超越論的哲学とア・プリオリについての論述とは軌を一にするのだ。フリースはそれを示そうとしたし、また、示し得た。

超越論哲学が先述のようなヨーロッパ共通の研究傾向とは別のもの、あるいは、その哲学が特殊なものであるということ、つまり、カントのア・プリオリは経験以前に与えられていることであり、経験から独立して与えられていることであるが、このことに對して、カントや普通のカント派哲学者は立証する責任がある。これに對して、フリースは違ふ。彼は、ア・プリオリなものが全学の中に既に前提されており、このことが、認識上重要である能力

の心理学的、人間学的研究のテーマとなり、明瞭に示され得るのだという事実を指摘したのである。フリースにとっては超越論哲學的神秘主義を防止することそのことが重要であった。そのわけはドイツ觀念論者がだんだんとその神秘主義を信奉するようになったからであり、また、その神秘主義がドイツ以外の国の人々により極めてドイツ的な洞察力の申し子として感嘆されはしたが、しかし幾多のあざけり、多くの無理解の原因にもなったからである。

もう一度明確に言っておこう。カントは当時の数学、物理学を利用したが、それと同じように心理学を利用しなかった。彼は数学、物理学におけるア・プリオリな諸前提を明白に、そして確信をもって取り出して考えたのに対して、心理学については、これを未熟な、心理物語として扱っただけであった。だから、これは事実を記述するだけに過ぎなかった。ライブニッツ、ヴォルフの合理的心理学の遺産をカントは知らなかった。その遺産は数学と物理学とのア・プリオリな部分に対応するものを持っていた。彼はその遺産を知らなかったので、彼は新しい学、すなわち超越論哲學を確立したのである。その後で、フリースはその合理的心理学に注目した。そして超越論哲學はその科学理論的な面から言えば合理的心理学そのものであり、この心理学こそそれ自身のア・プリオリな諸前提を意識して研究されたものである。フリースは、真の超越論哲學の核心となる場、すなわち認識と現実とのア・プリオリな構造の探究、解明の場を手中に納めるために、超越論哲學の中に合理的心理学、つまり彼の心理学の人間学の入る余地を見出そうと努力した。

当時ア・プリオリな構造の新プラトンの実体化をドイツ觀念論者が実際に行っていたから、フリースの努力は未来への道であった。フリースの思想は今日成果のあるものと思われるが、カント主義の中ですらそれに対する非難

と擁護が渦巻いている。

フリースは、理性批判は原則的に心理学的研究であると言わなかったカントを非難した。カント自身は、理性批判を人間学的批判と名付けたが、この批判の本質的なものがア・プリアリな理性構造の発見であると考えたのである。

以上の事柄をもっと明白にするためには、今世紀におけるフッサールの現象学とハイデッガーの基礎的存在論を生じさせた理念的状況に言及するのも得策であろう。この二人は心理主義であるという非難と対決した。二人はその時その時の領域の自発性、ア・プリアリ性、基底性という意味を論拠として、経験的研究に対立し、先の非難を排除したと考えた。なぜならば心理主義の中にある経験的研究は先述の自発性などに基づくか、あるいは、それらから誘導されると彼らは確信したからである。しかしながら二人の業跡はそれと同時に経験的、個別科学的研究内の分野、つまり心理学、心理学的人間学に貢献したのである。このようなことがフリースの頭の中にあつたのではないだろうか。

(五)

さて、心理主義は何を意味するのか、心理主義はどの観点から非難されるのか。これに対して、どんな人がフリースの支持者であるのか、フリースの誤りは証明、あるいは修正できるのか、いかにしてできるのか。これらについての考察は次の機会に譲りたい。今回は哲学史家、哲学者がフリースをどのように見ていたかということを述べ

たわけであるが、彼らの考えは必ずしも正鵠^{こく}を射たものとは言えない。例えば、フリースは、意識それ自体はア・プリオリなものだと言ったり、哲学的論理学の原則として、ある物事を考える時の根本法則を経験心理学によって証明することがあるとするのは、ばかばかしいことだと言って、フレーゲの反心理主義の主張とほぼ同じものがそこに現れている。この論文の中で挙げた哲学史家、哲学者はそのことを語っていないのである。（未完）